

1997年1月現在の報告と予定

- 南アへの本送付、総数10万573冊
- 昨年11月デベトンにて移動図書館ベース落成式
- 昨年11月移動図書館専門家と南アを訪問
- 南アNGOの2団体の交流のきっかけを作る。
- 3台の移動図書館車が工場で待機中。
- 3月にELETより来日。図書研修と講演会を行なう。

目次

| | |
|-------------------------|---|
| 移動図書館車ベースの落成式を行なう…… | 2 |
| MEIのメンバーと一緒に ELETを訪れる…… | 3 |
| 図書館員の見た南ア…… | 6 |
| 活動に参加している人の自己紹介…… | 7 |
| ホームページその他のお知らせ…… | 8 |



図書館ベース落成式。MEI代表ベントレイとTAAA野田

1996年11月南ア訪問の報告

移動図書館ベースの建物の落成式を行なう

野田 千香子

1996年11月16日から25日までTAAAから代表の野田千香子とコーディネーターの久我祐子、埼玉県立浦和図書館司書の古我貞夫の計3名が南アのベノニとダーバン周辺を訪れた。今回の訪問の主たる目的とその成果は次の4点である。

1 昨年からの懸案であったMEIの移動図書館のガレージ兼書庫の建物がデベトン学校内に完成し、その落成式をとり行なったこと。

昨年度の郵政省ボランティア貯金からの配分金に皆さんからの寄付金を足して、レンガづくりの立派な建物が完成していた。デベトンの地元の大工さんたちが白人のロータリークラブの助けも得て作り上げたものだ。11月18日、建物のドアに赤テープと花が取り付けられて、私がテープを切る役目を行なった。南ア最大の黒人居住区ソエトの新聞であるソエタン紙とベノニ週刊紙が取材に来ていた。デベトン小中学校の校庭に生徒数百人、教員、ハウテン州教育省ベノニ担当官たち、ロータリークラブ関係者、建設業者の人たち、PTA、MEIのメンバー、それに日本からのTAAA私たち3人が参加した。あいさつの間に何回も歌われた生徒たちの合唱は魂を揺さぶられるようなすばらしさだった。

2 埼玉県立浦和図書館司書の古我貞夫氏に、MEIとTAAAと共に図書館運行に関する会議に参加してもらい、その後もサジェッションやアドバイスを彼から受けること。

落成式直後に校長室にて、MEI代表のデイブ・

ベントレイやメンバー、教育省の担当官、教育省からの臨時の図書館事務員等と私たちで今後の図書運営についての会議を持つ。教育省は積極的に後押しする姿勢のあることを表明。今後の図書館員について、人数、資質等について、ベテランの古我さんの意見を聞きながら話し合う。この時点では教育省がスタッフを雇う意向であった。(が、帰国後の連絡では教育省では、予算が不足のため政府のRDPに申請するという事になった。)

3 ベノニのMEIとダーバンのELETを私たちが結び、互いに学び合う機会を作ること。

私はこの数年間に何回かELETを訪ね、ELETが指導してきたやり方で行なっている授業風景を各地でみせてもらってきた。生徒が積極的に授業に参加していくすばらしいこの方法をデベトンの教員に知ってもらえたらと、今まで何回も考えてきたが、今回は思い切ってデベトン校のデュベ校長を3泊4日のダーバンへの旅に同行してもらった。一方通行型の授業を行ってきたというデュベ校長はELETで大感激し、すぐにもデベトンの教員を連れてELETの講習会に参加したいと申し込んだ。ELETの方法は、図書活動を普及していくためにも効果的にちがいないとデュベ校長は張り切っていた。南アはつい数年前まで国内での交流や報道の自由にも制限があったので、日本の私たちから見ると、国内同士でも知らない情報がたくさんあるのだと驚くことがしばしばある。南アの民主化は本当に始まったばかりなのだ。

4 1997年度に私たちTAAAは、ELETのどのプロジェクトをどのように応援していくか、を協議し、決定すること。

ダーバンから100kmの農村地帯のマシヤマニ中高校の敷地内にリソースセンターを建設する。TAAAから送る本とELETの編集出版している教材をそのセンターを基地にして、TAAAから送

った移動図書館車を使って、近隣の学校等に団体貸し出ししたり、講習のために配布したりする。センターはELETの活動の拠点の一つにもなっていく。周辺は非常に貧しい農村地帯である。

私たちはマシヤマニにもでかけ、またELETの本部でも会議をもった。1月下旬にELETから企画の詳細が送られてくる予定である。

南アフリカ訪問記

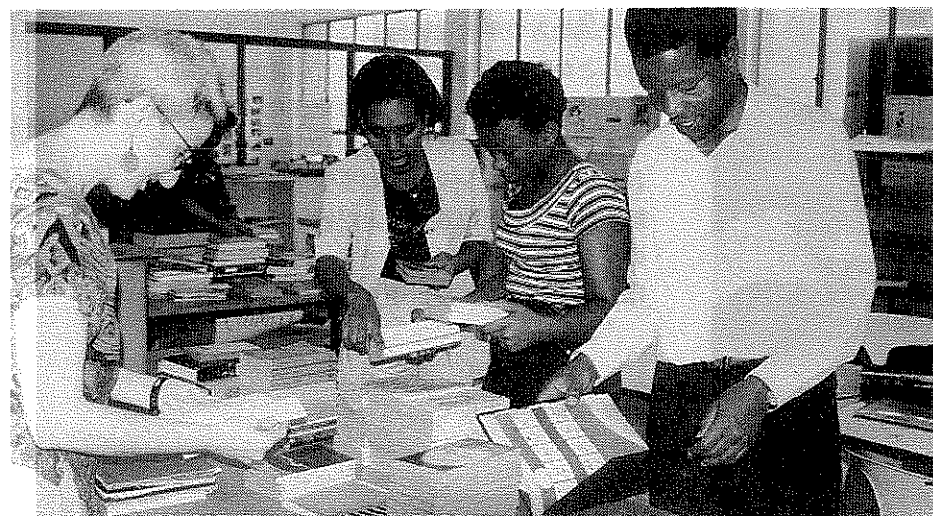
MEIのメンバーと一緒にELETを訪れる

久我 祐子

農村の学校を訪れて

今回の視察旅行では、ペノニにあるMEI (Methodist Education Initiative) とダーバンに事務所のあるELET (English Language Educational Trust) を訪問することになったが、ダーバンには、MEIの主要メンバーの1人であるデベトン小・中学校のドゥベ校長先生も同行することになった。MEIは、移動図書館車の活動拠点となるベース・ライブラリ(ガレージ兼倉庫)がほぼ完成し、いよいよ移動図書館車プロジェクトを本格的に開始する段階となった。そんなMEIに、本の有効活用に関するノウハウを長年蓄積してきたELETを是非とも紹介したいという私たちの意向をドゥベ校長先生は快く引き受けてくれたため、今回のダーバン訪問は、MEIとELETの交流のきっかけ作りを兼ねることになった。

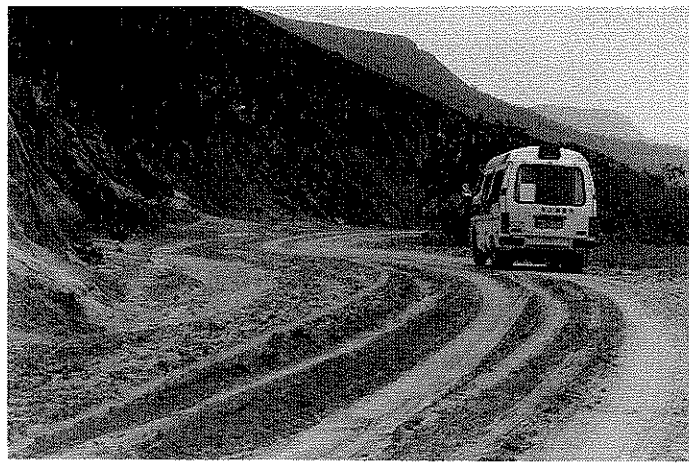
ダーバンに着いた2日目に、ドゥベ校長先生と私たちはELETのスタッフと一緒に、移動図書館車でダーバンから約100キロ離れたところに位置する農村ンドウエドウェへ向かった。この移動図書館車は、TAAAが1995年の春に寄贈したもので、形が楕円形的なこともあってここでは「ポーキュバイン(やまあらし)」と呼ばれている。そう言われてみれば、短足ででっぷりとした愛嬌たっぷりのやまあらしに見えないこともない。ポーキュバインは3人しか乗せられないので、車が一台、ポーキュバインの後ろをくっついて走ることになった。ELETは、ポーキュバインを使って貧しい遠隔地の学校に教材等を配布してきたが、ンドウエドウェもそんな支援対象地域の1つである。ELETは、ンドウエドウェにある中学校にリソースセンターを設置し、そこを



ELETで本を整理する
ドゥベ校長(右)

拠点として周辺の農村地域の学校を対象に移動図書館サービスを実施していくことを今年のプロジェクトの1つとして計画している。このプロジェクトがうまくいけば、ポーキュバインはますます忙しく活躍することになる。今回のンドウェドウェ訪問は、リソースセンターを設置する予定のマシヤマ二中・高等学校とその近くのヘロニバ二中・高等学校を訪ねることが目的だ。

幹線道路から離れると、舗装された道はなくなり、ポーキュバインにはけっして優しくなく、ねくね道やポコポコ道がたくさんでてくる。交通インフラの未発達な地域なのだろう。車やバスが通り過ぎる気配がない。ンドウェドウェはサトウキビ畑の広がる農村だ。畑の中を円形の伝統的なアフリカの家々がポツポツと点在している。山羊を飼っている家もある。この地域は一旅行者の目には一見牧歌的にみえるかもしれないが、ここの住民が貧苦の生活を送っていることは明らかだ。このような農村の中に訪問先のマシヤマ二中・高等学校が建っていた。中に入ると、ンタンジ校長先生が元気よく迎えてくれた。ダーバンから車で1時間通勤してくるというこの校長先生は、この村と学校が抱える問題を熱っぽく語ってくれた。彼の説明によると、ンドウェドウェの住民たちは、村の伝統的な酋長(チーフ)から土地を借りてサトウキビ畑を耕しているが、トラクター等の農機具を持たない彼らは収穫時になると卸先である白人経



営の民間企業に収穫労働を委託しなければならない。このようなシステム下では彼らの現金収入は年間1000ランド(約2万5千円)にすぎず、親戚の老人の年金でなんとか賄っているような実質的には失業状態の家が全体の90%を占めるという。私たちは、住民、酋長、民間企業の関係を掘り下げて尋ねることはしなかったが、伝統的な社会と近代的経済システムがからみあって、一般住民の生活を逼迫させる構造がここにあると思った。

マシヤマ二中・高等学校は、黒人たち特に地方の黒人の教育が政府から無視され続けてきたアパルトヘイトの時代に、ここの住民たちによって建てられた学校で、設立後、公立の学校として認可された。現在、全生徒数は1000人。教師の数は18人で、そのほとんどがダーバンから通っているという。1クラス69名から100名の生徒を収容するという教室を見てまわったが、どの教室も電気が1つもなく昼間なのに薄暗くて殺伐としている。水道も敷かれていないという。

「政府のRDP(Reconstructive and Development Program/復興開発計画)の教育援助は都市中心型で、地方の学校は後回しにされてしまいます。なんとかして学校設備を整えていきたいけど、政府からの援助はあまり期待できないのが現状です。かといってPTAの寄付金に頼るのも限られているし」とンタンジ校長先生はジレンマを隠さない。問題は設備不足だけではない。ここの生徒たちは15才くらいでも、国語力(英語力)は一般の7、8才程度だそうだ。校長先生は、説

み書きといった基礎能力を向上させるためには本や教材を充実されることが不可欠で、ELETが計画している移動図書館車プロジェクトがいかにこの地域で有意義になっていくかを力説していた。

次に訪れたハロニバ二中・高等学校も、マシヤマ二中・高等学校と同様に設備の貧弱な学校だった。女性のグメデ校長先生は、学校設備の不備問題だけでなく、村全体の教育環境の問題も説明してくれた。学級はスタンダード6(中学2年)からスタンダード10(高校3年)までであるが、スタンダード6か7で学校を辞める生徒が多く、スタンダード8に進む生徒は全体の約半数しかおらず、スタンダード10となると10人に1人の割合になるという。家が貧しい生徒が殆どで家計を助けなければならないのと、教育を受けていないため教育の重要性を認識していない親が多いことがこの理由だという。

2校を訪問した後、同行のドゥベ校長先生は、「今までに都市部や地方の貧しい学校を色々を見てきたけれども、これほど貧しい学校を見たのは初めてだ」と顔を曇らせていた。

学校の設備不足もさることながら、村全体の貧困ぶりがとても気になる訪問となった。酋長(チーフ)を中心とした伝統的な社会構造に近代的なシステムが支配者層に都合よくのっかっていて、一般住民の生活基盤や権利が蹂躪されているようだ。そんなことを考えていたせいだろう。天気はよかったのだが帰りの車から感じた村の空気はどんよりと重たかった。

魅力的なELETの教授法

ELETの事務所に戻りミーティングその他を行ったあと、リソース部のコーディネーターであるジュリア・ソスキングが、私たちにELETの英語教授方法をデモンストレーションしてくれた。ジュリアが先生でドゥベ校長先生と私たちTAAAのメンバーが生徒になった。ジュリアは、教科書の内容に関連する絵や地図を黒板いっぱい書き、私たちに色々な質問をする。クイズを解いているようでとても面白くて私たちは子供のように夢中になる。「こうやって、教科書を開く前に生徒たちに教科書の内容について興味を持たせるの」とジュリア。このようにELETの教授方法は、生徒たちに「なぜだろう、どうしてだろう」と疑問を起こさせながら、自然と教科書や本に興味を持たせていくものだ。クイズのような質問は、英語を学ばせると同時に生徒たちの思考力を育てていく。普段もの静かなドゥベ校長先生は、ELETの教授法や教材によほど興味を持ったとみえて、目を輝かせながらジュリアに積極的に質問していた。ペノニに帰っても是非交流を続けて教授法を学校の先生に学ばせたいといていた。

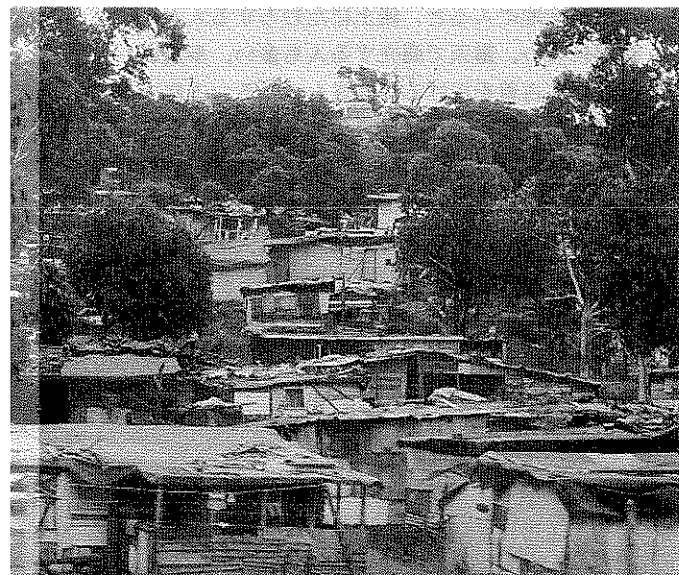
MEIとELETの交流を願って

MEIは、貧しい都市部の学校に移動図書館車の巡回していくことになる。一方ELETは、インフラの整っていない農村地域で移動図書館プロジェクトを開始しようとしている。いずれも移動図書館車のニーズを顕在的または潜在的に強く持つ地域で、プロジェクトの意義は大きい。

しかし、ELETもMEIもこれから様々な困難に直面していくことは不可避である。特に、ELETの農村部でのプロジェクトは、色々な面でかなりの忍耐力が必要だろう。

今回の私たちのダーバン訪問がきっかけとなって、ELETとMEIが緩やかで息の長い交流を始めてくれればと思う。そしてできれば、お互いの移動図書館車プロジェクトの問題点を検討しあったり、アイデアを応用しあったり、励ましあったりして欲しい。

ダーバンからマシヤマニ高校へゆく途中の住宅



図書館員の見た南ア

古我 貞夫

■「部分的先進国」南アフリカという国

ヨハネスバーグ空港に降り立ってみると、この風景のどこがアフリカなのだと思えてくる。よく整備された高速道路、プール付きの邸宅が並ぶ高級住宅街、遠くに見える高層建築群。金やダイヤモンドなど地下資源が豊富で、農産物は大量に輸出している。こんな豊かな国になぜ援助が必要なのか。

社会資本や産業基盤がかなりしっかりしている。一部に高等教育を受けた知識階層がいる。おそらくヨーロッパの平均的生活水準を越えているだろう。人口の大多数をしめる黒人の貧困を切り離して、白人だけがいい暮らしをする。アパルトヘイト基本四法は廃止された。総選挙によってマンデラ政権が成立した。それでも実質差別の解消にはとてつもない道のりがある。

■図書館運営を共に考える

11月18日、ドゥベ先生のいるデベトン小学校に向う。移動図書館車と本を収納し、巡回の起点となるセンターが当会の援助で完成し、落成式が行なわれるのだ。校長室に関係者が集まる。MEIのメンバーとハウテン州教育局の職員がいる。オープニングを前にして、移動図書館車のスタッフは州の教育局が出すということで、すでに話がついている。何人でやるのが最大の懸案事項だ。「スタッフの人数は仕事量から割り出すものだ。サービスの対象はどのくらいあるのか。」と私が口を挟む。「小・中・高、合わせて40校、約6万人の生徒がいる。」「スタッフは5人必要だ」「そんなに出不せない、何とか3人でスタートできないか」「その人数でやるには、対象学校を絞こまなきゃだめだ。増員の努力も必要…」等の意見が交わされた。翌日の夕食会では司書の資質が話題になった。私は充分に体力があり、しっかりした目的意識を持ち、対応の態度が良いこと等

の条件を述べた。私はMEIの主催者、デイブ・ベントレーに「少し先を見越したシナリオを用意した方がいいのではないか。」と助言した。すると彼は私たちが帰国するまでにそれを書き上げるという素早い反応を見せた。今頃これを基にした教育局との折衝が進んでいるのではないだろうか。

■この国の人々の生活を見た

ヨハネスバーグ郊外ペノニ市の白人の高級住宅街を散策してみた。美しい町並みである。1区画が200~300坪くらい。大きな庭にプールのある家も多い。こんな大邸宅に住んで、掃除だって草取りだって大変だろうなんて、所帯じみた考えが頭をよぎる。黒人のメイドや庭師がただみたいな給料で使えなかったら、成り立たない生活なのだ。近づいてみると猛犬がほえる。ゲートにセキュリティシステムの表示。この住人たちが何を恐れているのか歴然である。

教会からの帰り、デイブがデベトン市の黒人居住区に連れていってくれた。政府の住宅改善事業が進行中で、新しい家が多い。この国は地震がないのでほとんどすべて煉瓦づくりである。政府が重点施策として貸し付ける低利の住宅基金にしても、利用できるのは定収入のある人たちだ。失業率がべらぼうに高い黒人たちにとって、住宅取得は達成困難な目標である。

旧市街地に入ると、路上にたむろする人々の姿が目立つ。露天で商売する人も多い。歩道いっぱい古着を広げるおばさん。つるつるにすり減った自動車のタイヤを積み上げて売ってお兄ちゃん。中には出所の怪しげなものもある。それにしてもなかなかしたたかな生活力である。もちろんちゃんと店を構えて商売する人もいる。しかし、頑丈な鉄格子が店頭をガードする。いったん暴動が起これば、略奪を免れられない。

デイブはさらに車を進めてエトワトワ地区に

活動に参加している人の自己紹介

◆井出利栄

浦和市にす住む、46才の専業主婦です。朝日新聞を見て、この会を知りました。

南アのアパルトヘイトの事は、聞いたことはあっても、南アに対する知識はほとんどない私です。こんなことを書くとい生懸命活動している皆さんに叱られそうですが、月に一回、本の荷造りをお手伝いするだけと、単純に考えて始めました。一市民が集まって、声を掛

け、あちこちに働き掛けて本を送るだけでなく、移動図書館車まで、海を越えて送ってしまうなんて……お手伝いをしているうちに、野田さんや他の人達の熱心な南アに対する気持ちと活動を目のあたりにして、家庭にどっぷり漬かった専業主婦には、ただただ驚くばかりです。そして活動を開始することはできても、この先長く続ける事は大変だと思います。これからも皆さんが心置きなく活動が出来るように、会報の発送のお手伝いをしたいと思っています。

入る。貧困層のが住んでいる所である。ほったて小屋である。そういえば、旧市街にも煉瓦の家に並んでほったて小屋があったりした。デブトンにいる身内を頼って田舎（ホームランド）から出てきた親族のために建てたものだ。貧しいだけに一族の結束は堅い。エトワトワにも新しい住宅建設の予定がある。自分で家を建てる人もいる。「造りかけの家 のそばにほったて小屋があるだろう。その小屋に住んで、毎月の収入の中から買えるだけの煉瓦を積み上げていくんだ」文字どおりの“住宅積み建て”である。「父ちゃん、なかなかでき上がらないね」「ここんとこ稼ぎが少ないからなまっ、こんなもんだ」なんていう会話が聞こえてきそうである。「ところで土地の方は？」「安いから問題ないよ。一区画500ランドってとこかな」「1ランド25円として12,500円！日本じゃ土地は家より高いんだぞっ！」

ダーバンでの最後の日、ELETは「せつかくですから観光でも」という。野田さんはそれを断って、「スクォッターキャンプが見たい」という。ヨハネスバーグには有名なソウェト地区がある。そしてダーバンにはソウェトに次ぐ規模のスクォッターキャンプがある。まず、ELETの職員ピンディーが私たちを連れていったのは、体育館みたいな大きな施設である。政治抗争で家を失った人たちの避難所である。どういうわけか1階はがらんどで2階に女性と子供がいる。石油コンロとわずかばかりの食料のストック。マットレスや毛布が積み重ねられている。どんなに生活が苦しくても助け合って生きていくのが、黒人たちのコミュニティーの強さである。

「1階は男たちのスペース」と聞いて首を傾げる。昼間みんな働きにいらっていると、毛布一枚ないではないか。男たちは何回かの冬を毛布もなく過ごしたのだろうか。心が痛む。

「このあたりはインカタの地域なの。私たちはこわくて近寄れない」とピンディー。ここではANCとインカタとは犬猿の仲であった。ダーバン市内で見かけたストリートチルドレンの多くがこうして親を失った孤児である。

ピンディーは行く先々でガイドを調達し、キャンプの中に入って行く。顔役の了解なしに、けっしてよそ者の入れる地域ではない。水道のそばで洗濯をする少年に他の水道はどこかと聞くと、1ブロック向こうと答える。不思議なこ

